

ナイルの水源の再発見

——外傷臨床に精神分析的視点を生かす⁽¹⁾

森 茂 起

まず極めて現実的な事情から話を始めたいと思います。

今ここに並んでいるシンポジストの中で、私は精神分析の只中ではなく、その辺域、あるいは周辺に位置する人間だと思⁽²⁾います。ここでのお話しも、いわゆる精神分析の設定から一番遠い状況に焦点を当てるものです。川畑先生の整理に従いますと、「精神分析的視点を持った心理療法」⁽³⁾のなかの、さらに周辺に位置するものです。なぜなら、後に紹介する例のように、心理療法という設定さえもっていない状況の中にある精神分析的要素を考えたいからです。

私の日々の仕事には、分析の設定を持たない仕事はかなり分量を占めています。非臨床専門家に向けての研修会、心理療法とは名づけられない臨床実践に携わっている実践家の

研修会などがその例です。主任児童委員に向けての児童虐待防止対策に関する講演は前者の一例ですし、児童相談所のケースワーカー、心理士との虐待事例検討会や、児童養護施設の直接処遇職員との事例検討会などは後者の例といえます。

こうした傾向は、私が関わる問題群の性質により生まれたものです。児童虐待防止対策はその一つの柱であり、性暴力被害者の援助、DV被害者への援助対策など、暴力被害者への援助一般がその周辺に位置します。こうした問題群は、社会における被害の一般的認識から生まれてきたもので、理論的オリエンテーションではなく、関わる問題によって領域が形成されています。学会で言えば、「子ども虐待防止学会」「トラウマティック・ストレス学会」がこれら一連の暴力問題を

議論する主導的役割を果たしています。私も参加するこれらの学会は、その性格上、医師、心理士だけでなく、教育専門家、福祉専門家、法律専門家から各種NPO団体の人々までの参加が見られます。心理学という枠組みで組織されている心理臨床学会、あるいは精神分析という一つの学あるいは実践原理によって組織されている精神分析学会などと異なるところで、社会で発生する特定の問題への対処という目的を共有して組織されているからです。

先ほど触れました私の個人臨床以外の仕事は、「方法中心」「理論中心」「学問中心」の領域ではなく、「問題中心」の実践から生まれたものです。考えてみれば、臨床実践は常に二方向から成り立っているものでしょう。問題に対して理論や方法を適用していく方向と、問題への対応から理論や方法を生み出していく方向であり、そのいずれもが重要です。精神分析内においても、戦争神経症が発生することで、戦争神経症への対応という実践が生まれ、そこから新たな理論が生み出された歴史があります。戦後の戦災孤児対策は、子ども治療の実践や、子どもの発達理論に大きな影響を与えました。そして生まれた理論と方法が、新しい実践を生みだします。

ただ、一旦理論や方法が形成されると、特定の理論や方法

の発展や維持ばかりが関心の中心を占める傾向があることは注意しておかねばなりません。グループが成立すると、必ずグループを維持する幻想の力が働くというピオンの理解には大きな真実があります⁴。問題への取り組みよりも、理論や方法を共有する集団の維持が動機になると集団は病理的なものになります。

「問題中心」の実践に関わる私の関心と今述べた問題意識を結びつけますと、今現在進行しつつある、「児童虐待」や「外傷」に関わる実践的問題を受けて、精神分析がどのような新たな実践を生み出し、どのような役割を果たしていくかを問わねばなりません。そしてそう問うたときに、私が残念に思うことは、「子ども虐待防止学会」や「トラウマティック・ストレス学会」において、精神分析を背景に持った実践家に出会うことがまれであり、ましてや精神的オリエンテーションによる議論をそれらの場で聞いたことがないことです。

この背景には、心理療法あるいは精神医学におけるEBMの展開があるのでしょう。児童虐待防止、トラウマ臨床の領域では、EBMを基本とした研究、実践が盛んで、アメリカの医学界における力動的精神医学の衰退に見るとおり、EBMと折り合いの悪い精神分析が容れられにくい状況がありま

す。EMDR、PE等、アルファベットで表記される治療法が開発され、実践され、そのエビデンスが蓄積されるという流れの中で、精神分析的心理療法の影がうすくなっている印象があります。

児童虐待や心的外傷の主題が精神分析と関わりがない、あるいは少なくとも関わりの薄い主題であるとすれば、そうした現状もやむを得ないかもしれません。しかし、誰もが知るとおり、いずれの問題領域も、精神分析の発生と極めて深くかわりを持っていきます。そもそも、子どもへの性的暴力を主題としたところから精神分析が始まりましたし、外傷神経症とヒステリーの異同は、フロイトが精神分析を創始するころの最も重要な主題でした。同じ主題は、第一次世界大戦において再登場し、「快原理の彼岸」に結実したことはよく知られています。

ここで、『ヒステリー研究』から一部を引いて見ます。

「トラウマ性神経症において、……実際の病因として作用するのは、驚愕情動という心的トラウマである。これに類似したことであるが……多くのヒステリー症状に、心的トラウマと呼ばねばならないさまざまのきっかけのあることが明白になった。驚愕、不安、恥、心的苦痛といった苦しみをとも

なう情動を呼び起こす体験であれば、それらはすべてトラウマとして作用しうる」⁽⁵⁾。

この記述は、今日トラウマに関心を持つものにとつて何の違和感もなく受け入れることができるだけでなく、その明晰さに新鮮な驚きさえ覚えます。この認識に基づく治療法がいわゆるカタルシス法であり、外傷体験の想起とともに、記憶にとまらぬ情動を排出し、その情動に言葉を与えることが治療を導くとフロイトは考えました⁽⁶⁾。

ただし、フロイトは、そうした想起が容易に起こらないことと、想起のためには、「抵抗を克服せねばならない」ことと、気づき、そこから生まれた理論をこう記述します。「病因として働く表象が意識化されることに（想起されることに）反抗する心的な力が患者の内で作動しているのであり、そして、私的心的な作業が克服せねばならないのは、患者の内この力なのだ」という理論である⁽⁷⁾（傍点原文）と。この力とはつまり抑圧として記述される力で、その対象は欲動と結びつけて理解されるようになります。しかしこの段階では、抵抗の向こう側にあるものは、「知りたくない」ものであり、治療的に最も重要なのは「忘れ去られた」思い出、つまり外傷的な出来事に由来する思い出でした。

この段階で表現されたシンプルな外傷論が、後に記憶の眞実性に関する疑問によつて覆され、欲動論に重点が移動したことはよく知られています。「精神分析」という方向性は、ヒステリー研究の外傷論よりも、外傷論から欲動論に移つていったこの転換によつて定まりました。その後対象関係論、対人関係理論と、外的対象も重視する理論が登場したとはいえ、内的現実を重視するという方向は基本的に変わつていないでしょう。

しかし私はここで、外傷理論がもつていた一つの重要な要素、つまり外傷的出来事、あるいは外傷体験の発見という要素にあらためて注目してみたいと思います。ただし、これから述べますように、単純に外的事実の発見としてそれをとらえるのではなく、外傷的出来事が発見されることの意味を考えてみることに、発見の意味を発見するという形で外傷的出来事を再発見してみたいと思うのです。

フロイトによる外傷体験の「発見」は、実は「ヒステリー研究」よりも、その直後に書かれた論文、「ヒステリーの病因について」でさらに先鋭的な形をとっています。そこでフロイトは、個々のヒステリー症状の背後に、近い過去の外傷体験を捜し求めるだけでなく、ヒステリー症状全体の背後に、

遠い昔の幼児期にさかのぼる性的外傷体験を想定したのです。いやフロイトによればこれは、想定ではなく、「ナイルの水源の発見に比すべき」発見⁽⁸⁾でした。

私はこの「ナイルの水源」という比喩を、極めて意味深いものと感じます。「発見」とは何かをみごとに示しているからです。考えてみれば、ビクトリア湖は西洋人が発見する前からそこにあり、その土地の人は知っていたでしょう。ですから、イギリスから来た探険家がそれを「発見」というのは、それを彼がはじめて見たということではありません。存在はすでに人類の一部によつて知られていたのですが、探検家がそれをナイル川の下流と結び付けて理解し、地図上にその関係を記したときに、それは「発見」と呼ばれたのです。つまり、一つの理解の図式の中に位置づけられてはじめて、その「意味」が発見されたのです。そのような意味を伴わなければ、たとえビクトリア湖を見たとしても発見とは言えません。同じ事情は、コロンブスによる「アメリカ大陸の発見」にもあります。アメリカにはネイティヴ・アメリカンの人々がすでに暮らしていたのですが、コロンブスがインド航路を発見するために航海したことによつて、それは新たな意味を持つて発見されたのです。ただしこの場合、彼がはじめ考えたよう

なアジアではなく、それまで西洋人に知られていなかった大陸であったことが認識されたのですから、どの時点で「発見」と呼ぶか難しいところです。これ以上地理上の「発見」について考えることはませんが、こうした比喩は、後にフロイトが外傷について述べる、事後性*Nachträglichkeit*、つまり外傷は、出来事に時間的に遅れて認識されることではじめて外傷となるという主張にも関係する問題領域を照らし出してくれます。⁹⁾

ナイル川から分析治療に話を戻しますと、治療によって長く想起されたことのない記憶が思い出され、あるいはまたまって認識されたことのない体験が整理され言葉として表現されることで、過去にあった出来事がはじめて認識され、意味を与えられて位置づけられます。それが分析的な意味での「発見」であって、外的事実を断片的知識として知るだけではその意味は見出されなままです。

ナイル川の水源の比喩と同じように、子ども時代の外傷の出来事は、その出来事の現場にいた人々によってはすでに知られていました。つまり暴力を加えた加害者は当然知っていますし、家族の多くも知っていたはずで、加害者と被害者のみがその出来事を知っていることはむしろまれであって、

家族の誰かがその事実を知りながら、秘密として封印し、その出来事の意味は考えられなままに放置されているのが普通です。¹⁰⁾ だれも、その意味を考えようとしないうちになっっているのが外傷の出来事だといってもいいくらいです。一つの人生の流れの一部としてその出来事の意味を把握し、位置づける作業は、治療の中で過去の記憶を頼りにその事実を発見する過程ではじめてなされるわけです。

事実を事実として認識すること、少なくとも実際にあったはずの事実にしても近い認識に近づいていくことは、人間の心にとって極めて重要でありながら困難な作業です。そこには意味の認識が伴い、意味が苦痛をもたらすがゆえに、接近が回避されがちです。その結果、自らの過去に重大な出来事がありながら、その出来事について知らないことになり、心に歪みをもたらします。

先ほどの「問題中心」学会でしばしば主題となる「解離」という現象——メカニズムの名前としても、症状名としても、障害名としても使われます——も、そうした歪みの一つです。解離については現在も未知の部分が多く、概念そのものも揺れ動いています。その整理にここで取り組むことは私にはできません。ここでは、衝撃的な出来事に際して、何らかの意

識の断裂、あるいは意識と感情体験あるいは身体的体験の断裂などが起こることだけ指摘しておきます。それがその後の、健忘や、意識の不連続的变化や、感情の爆発など、いわゆる解離症状が現れる素地となります。解離が存在すると、それを引き起こした出来事の認識が妨げられ、私たちは自らの体験を体験として理解することができなくなります。

解離は、「ヒステリー研究」時代にさかんに議論の対象となっていた問題で、その理解を当時最も先進的に行ったのがフランスのジャネであったことは、現在外傷論の共通認識になっています。^⑪ ジャネの解離論から距離をとり、抑圧、転換によって神経症メカニズムを説明していったところにフロイトの精神分析の特徴があります。^⑫ その意味で、ヒステリー研究においてフロイトが述べていた「忘れ去られた」思い出という現象が、解離によるものか抑圧によるものかが問題となります。論じるに値する重要な問題ですが、ここではこれ以上触れるゆとりがありませんので、おそらく当時フロイトが直面していた忘却現象には、解離として理解するほうが適当なものと、抑圧として理解するのが適当なものが混在していたであろうという推測だけ述べておきます。そのうち後者に注目していったことが、以後の精神分析を性格づけられます。

話を戻しますと、外傷理論から欲動理論への移行は、外的事実の意味の発見という一側面を精神分析から除外する、あるいは少なくとも副次的な仕事としたことを意味します。精神分析の成立にともなって起こったこの移行を一部逆行させようとしたのがフェレンツイでした。フェレンツイは、一九三二年の国際精神分析学会の席でこう発言しています。「厳格な精神に満ちた名望ある家庭の子どもまで被害にあっていると考えるのは勇気がいりますが、想像をはるかに越える多くの子どもが真正正銘の性的虐待の犠牲となつています」と。彼が訴えたのは、理論的見直しだけでなく、今現在社会で発生しつつある暴力への注目でした。彼の外傷への注目には必然的に解離への注目が伴っており、「分裂(Spaltung)の用語を用いているものの、彼の論じる臨床事例を見ますと、今日であれば解離という用語で記述されるであろう現象に直面していたことが分ります。^⑬

しかし、フェレンツイの訴えにもかかわらず、全般的に子どもの外傷体験に関心がそれ以上寄せられることはなく、彼の主張は歴史の中にしばらく埋もれることになりました。フェレンツイ以後、戦後のある時点まで、外傷問題は論じられることが少ない時代が続きました。戦後の児童虐待の「発見」、

虐待防止対策などを通じ、世の中におびたらしい子どもへの暴力が存在することへの認識が進むことで、ようやく外傷問題が再び心理療法の重要な主題となってきました。児童虐待、女性の暴力被害などへの認識、DIDに代表される解離性障害への関心の高まりなどについて詳しく触れることはしません。ただ、外傷に起因する障害において、外傷体験の想起が再び重要な治療的契機として浮かび上がってきたことがここで問題です。外傷性記憶を物語り記憶に変えていくといった今日の治療論は、かつてフロイトが『ヒステリー研究』から「ヒステリーの病因について」の過程で行った認識を再びなぞっているように見えます。実際、有名なハーマンの『心的外傷と回復』は、そのようにフロイトの初期の仕事と、七〇年代以降の外傷認識を重ねています。

さてごく粗いものですが以上で歴史的振り返りを終えて、私の現在の臨床経験から一つの例を考えてみたいと思います。際立って外傷的といえる記憶が問題となったA子の例です。私の関わるある児童養護施設で経験したエピソードです。小学校中学年のA子は、母親の縊死の第一発見者となったという外傷体験をもっています。父親はすでに離婚して別居し、

子どもを育てる状況にはなかったもので、施設入所となりました。母親は長くうつ病を患った末の自殺でした。ただ、A子の周辺には援助の手を差し伸べる近隣の大人があり、深刻な虐待やネグレクト状態にあつたとは言えません。母親との関係も基本的には肯定的なものです。が、うつ病によってきめ細やかな子育てができなかった状況でした。

細かな経過は省略して、ここで取り上げたいのは、入所から二年近く経過した頃のエピソードです。ある日、施設職員が、彼女が紐を首にかけて「首絞め遊び」をしているのを発見したのです。職員はあわてて止めて、そんな遊びをしないように注意しました。その数日後のことですが、食事中に彼女は急に「お母さん死んでん」と言って、周囲は突然の言葉に何もいえなかったということがありました。

さてこの二つのエピソードのちに開かれた私の参加するホームの懇談会¹⁴で、この話題が出ました。そして少し検討するうちすぐに、その時期が母親の命日の周辺であることに気づきました。あきらかにA子は、母親の亡くなった時期に、外傷的記憶のフラッシュバックを起こし、その記憶を言葉で伝えるかわりに行動で表現したのです。そしてしばらくおいて言葉で表現したのです。

この経過にはいくつもの反省点があります。A子が母親の死に遭遇した外傷体験をもっていることは職員も承知していましたが、「首絞め遊び」を発見した瞬間に、過去の体験との関連に思い至りませんでした。もしすぐに思い至っており、命日が近いことと関連付けられれば、「お母さんがそんな風に亡くなったところを思い出したんだね」と話しをし、言葉で彼女の思いを取り上げることができたでしょう。これは、その場にいた職員個人の反省点ではありません。命日が近いことをホームで共有し、いわゆる記念日反応——ここでは命日反応といったほうがいいでしょう——が起こることを予想しておくことができればよかったです。さらには、命日に何らかの特別な関わりをすることを前もって計画することもできたでしょう。家庭で暮らす子どもであれば、当然墓参り等があるはずの日なのです。そうすればA子は、「首絞め遊び」で体験を伝える必要がなかったかもしれません。親の突然死の結果入所する子どもの少ない状況の中で、このような対応がなされなかったことが反省点です。助言者として関わっている私の反省点でもあります。

この反省点を前提として、ここでA子が「首絞め遊び」をしたこと、その後「お母さんが死んだ」と口にしたこと、そ

うして懇談会の中でそのエピソードについて話し合われたことの意味について考えてみたいと思います。

母親の死はA子にとって実際に体験した現実です。A子が助けを求めて駆けつけた大人の手によって母親の死は発見され、病院に搬送されて、医学的手続きが踏まれました。そういう意味では、母親の死はすでに明らかにになった事実です。しかし、A子にとっての母親の死、母親の死を発見した体験がどのようなものであったかは、実は、まだ発見されていないのではないのでしょうか。「首絞め遊び」でしか表現できなかったA子の記憶は、言葉で物語ることのできないいわゆる外傷性記憶の形をとっており、A子自身にとってもまだ明確に把握できないものです。

しかし、その遊びが発見され、後の懇談会で検討されることで、はじめてA子の過去の体験と現在の行動が結び付けられ、彼女の体験がそのような作用を引き起こすものであることが、施設職員および私というグループの中で認識されました。A子の人生という時間の流れの中でその体験が——まだ一部ではありますが——位置づけられ、そこに意味が読み取られました。ピクトリア湖にナイルの水源という意味が与えられ、一つの地図のなかに位置づけられたのと似ています。

さらに比較を進めれば、水源であることはおよそ確かめられたものの、湖の正確な形や、水量や、そこからナイルにいたる流れの詳細はまだ不明であったことも、今回のA子の体験の発見と似ています。その外傷体験がどのように作用し、他のどのような要因によって影響を受け、現在どのように残っているかの詳細は、まだ大部分不明だからです。¹⁵

ですから、この出来事は、A子にとつての外傷体験の意味の発見の第一歩であり、これからさまざまの機会を通して意味がさらに見出されていかねばならないでしょう。その過程は、A子の内部で体験が整理されていくことと、周囲の大人がその意味を理解していくことの両者の共同作業であるはずで

です。もう少し厳密に言うくと、この認識作業を二つの水準に分けて考えておくことができるでしょう。まず、外傷的出来事とその作用の認識の水準です。A子が遭遇した事件は、すでに知られていましたが、それがどのような作用を人間の心身に及ぼすかの認識がともなわなければ、真の発見とは言えません。児童虐待が行われていることは、隣人の観察によって発見することが可能ですが、その虐待が、どれだけの苦悩を生み、どれだけの否定的作用を人生に及ぼすかが認識されなけ

れば、その実態を理解したとは言えません。

これとの関連で触れておきたいと思いますが、同じ意味で、たとえば戦争による被害は、まだそのごく一部しか発見されていないという印象を持ちます。死者の数、町の破壊の外的姿はそれなりに認識されています。しかし、一人一人の苦悩と、その苦悩がその後の人生、家族、社会に与えた変化は、個人が内的被害を認識する力を獲得し、その認識を伝えていかなければ、世の中に存在しないも同然です。最近発行されました、『ヒバクシャの心の傷を追つて』¹⁶には、広島と長崎で原爆被害を負った人々がどのような「心の傷」を負ったかが、被爆者の証言をもとに論じられています。原爆による被害についてはすでに多くの分析があります。しかし、この書に記録されている証言が伝える被爆直後の経験とその作用の実態の分析は、その経験がどれほどの破壊的なものであったのかを再発見、させてくれます。被爆者一人一人の目を通した被爆の実態、あるいは意識的に直面することのできなかった実態を明らかにすることを通し、その被害総体の規模と質がはじめて発見されるのです。

話を戻しますと、もう一つの水準は、A子とA子の援助者のかかわりの観点、あるいはそのかかわりによって生じる援

助者自身の変化の観点です。A子のような形で外傷場面が再現されるといふ認識は、たとえフラッシュバックという現象を知識として知っていたとしても、日常的に接している職員にとつてはショックを伴うものです。そのショックを受け止め、理解に変える過程によつて、単なる知識が生きた知識に変わります。A子の症状、行動の意味を外から理解するだけでなく、感情を伴った個人的理解が生まれることで、援助者の中にその出来事が「発見」されるわけです。そして、そうしたショックを受け止める力は、援助者一人の中にあるのではなく、理解を共有できる場の支えによつて生まれます。ここでは、事例について話し合う機会がその場の役割を果しています。ちなみに、この水準の議論は、フロイトの発見には含まれず、その後の精神分析の歴史の中で認識された側面です。

観点を變えて、A子の例を、解離という視点から見てもみましょう。A子に起こつたようなフラッシュバックは、そこに解離の作用が働いている表れでもあります。体験の認識が解離によつて妨げられ、通常の意識から隔てられているからこそ、そのような形で突然表に現れるわけです。解離は、体験の苦痛から守ってくれますが、体験を消化しそこから意味を

汲み取る作業を妨げます。別の言い方をすれば、衝撃的体験が意味を汲み取る力を超えてしまい、意味によつてその体験をそれまでの認知枠につなげることを不可能にするがゆえに、解離と呼ばれる事態が発生します。解離されたものはいつまでも生の体験として残り、その意味は「考えられない」状態になります。

A子の体験の意味は、まず観察した大人の中で考えられ、汲み取られました。それは、A子の中の解離を弱めていくための重要な要素です。症状から意味を汲み取り、子どもの状態と人生の全体像の中に位置づける作業は、症状を生み出している解離に変化を起こす作業の一部です。その作業を積み重ねることで、解離なしに体験の苦痛を感じることを支える環境が生まれます。先ほどの反省点はあるにせよ、このような理解の作業を通して、A子の体験は、彼女を取り巻く人々とA子自身との共同作業でしだいに扱われるようになることが期待できます。

A子のような外傷体験ではなく、虐待的環境についてですが、現在も被害が継続している状況では、解離症状の治療はできないと言われます。DID（解離性同一性障害）の治療について、「現在置かれた環境で過去に外傷を与えた人との

遭遇が日常的に生じている環境では、D I Dの改善は期待できない」と言われるのはその一例です。解離症状を維持させるような外的状況が続くなかで解離が弱まれば苦痛と混乱が増大するだけだからです。

被害が継続している状況と言えば、暴力が継続的に行われている場合を思い浮かべますが、ここで述べました見方からすると、それと同時に、あるいはそれ以上に、暴力が被害者に与える作用、そこで体験されている苦痛が理解されていないことが被害の重要な要素です。暴力を受けながら苦痛を理解されないという事態は、子どもを完全に「一人である」状況に追いやりませす。暴力を加える行為の中では、当然ながら、そこで被害者が体験する苦痛の意味を受け取ることが拒否されています。苦痛の意味をもし感じるならば、そのような暴力を加えることは不可能だからです。苦痛の理解の拒否が、被害者が体験の意味を理解することを不可能にすると考えることができるでしょう。こう考えると、環境が被害者の体験の意味を受け取ることとは、逆に、解離を解消していく上で重要な契機となります。

A子についての議論はこれくらいにしておきましょう。こ

ナイルの水源の再発見―外傷臨床に精神分析的視点を生かす

の例に基づいてここで考えたいのは、こうした日常生活における子どもとの関わりにも、精神分析的な要素があるということです。精神分析は意味に関わる作業です。外傷体験について言えば、外傷から意味を生み出す作業が、精神分析の作業になります。精神分析的な設定は、その作業をもっとも有効に進めるために設けられたものですが、それ以外のあらゆる環境下においても、意味の生成は起こり得ます。ここで触れた例のような、生活の中で子どもの行動の意味を考えていく作業にも同様の過程が存在します。

児童養護施設の臨床が、生活療法と個人心理療法とに分けて整理される場合があります。そのように整理しますと、生活臨床は行動の修正や教育的指導であって、精神分析的要素は個人心理療法のみにあるように見えます。しかし私は、そのような二分法は避けたいのです。いずれの設定の中にも、精神分析的要素があり、またそれ以外の要素もあると考えたく思います。生活場面对心理療法場面という軸で考えるよりも、生活場面にも心理療法場面にもある、意味の探求と意味の回避という軸で考えるほうが適切ではないでしょうか。例として紹介しました事例懇談会のみならず、たとえば生活場面を持たれる親との立ち話のなかで、施設入所の理由を説明

する場で、家族の話を生活の中でする際に、子どもの体験の意味を考え、言葉にしていく作業は可能です。あるいは、はじめに触れましたような、主任児童委員、ケースワーカーなどと接する機会にも、その要素は含まれます。逆に、ここでは詳しく考えるゆとりがありませんが、個人療法の中にも精神分析的でない働きがさまざまあります。

意味を見出していくという作業は、しかし、精神分析でその作業が抵抗に曝されるのと同じく、いたるところで抵抗にあい、あるいは回避されます。その作業へのためらい、不安、恐怖が、子どもにも大人にも起こります。そのために、事実を確かに認識しその意味を考える作業は回避されがちです。その一つの現れですが、極端な場合、家族の話には触れないことを基本方針としている施設すらあります。そこに触れたときに起こる混乱を回避したいからでしょう。実際はそうした対応によって生活上の混乱は増加していると思えますが。悲劇的事態から生じる意味は、往々にして強い苦痛を引き起こすものであり、できれば理解したくないものです。先に解離の問題の中で触れたことの繰り返しになりますが、意味の生成という観点から見ると、そこから生まれてくる意味があまりに強い苦痛をもたらすがゆえに、意味の生成を避けよう

とする働きが起こると思われます。

したがって、精神分析において分析的設定の重要性が唱えられるのと同じ意味で、生活場面や事例検討会においても、苦痛を伴う意味を受け止め、そこから生じうる混乱を包容していけるような場面設定が必要です。その設定は、事例検討会の持ち方のような形式的な側面もありますが、むしろ関わるすべての援助者の中にある内的姿勢が生み出すものです。意味を受け止められるような内的姿勢を普段から醸成しておく、言わば治療的な土壌を耕しておくことが課題となります。この課題についてはこれ以上論じるゆとりがありませんので別の機会にゆずります。

ここでお話しした事柄が、今現在心理臨床の重要な課題になっている、虐待防止対策や福祉領域の臨床、とりわけ外傷臨床の中に、より自覚的に精神分析的要素を見出し、生かしていくための一歩となれば幸いです。

(1) 本稿は、甲南大学で開催された「精神分析的心理療法フォーラム」(二〇〇七年二月二日)におけるシンポジウムで発表した原稿に加筆したものである。

(2) 他の二人のシンポジストは、川畑直人氏(京都文教大学・有

限会社ケーアイビービー)、平井正三氏(御池心理療法センター) / NPO法人子どもの心理療法支援会)であった。

(3) 川畑氏は、「いわゆる精神分析的心理学療法」と「精神分析的な視点を持った心理学療法」に分け、後者の意味では、箱庭療法、家族療法、行動療法等、精神分析的とは見なされていない心理療法においても、精神分析的な視点を持つことがあり得ると論じられた。

(4) ビオンのグループ理論を紹介する文献は多数あるが、ここでは次の文献をあげておく。マーガレット・J・リオ「グループに関するビオンの仕事」モートン・キッセン編『集団精神療法の理論』佐治守夫、都留春夫、小谷英文訳、誠信書房、一九九六年、一五五―一七一頁。

(5) 『ヒステリー研究』(上) 金関猛訳、筑摩書房、二〇〇四年、一五頁。

(6) 同右、一六頁。

(7) 『ヒステリー研究』(下) 金関猛訳、筑摩書房、二〇〇四年、一四三頁。

(8) この印象的な言葉は、エレンベルガー「無意識の発見(下)」、木村敏・中井久夫監訳、弘文堂、一九八〇年、ハーマン「心的外傷と回復(増補版)」中井久夫訳、みすず書房、一九九九年にも引用されている。

(9) 「発見」という事態について、ここでの議論が極めて単純化したものであることは否めない。ナイルの水源がはたして客観的に発見される事実なのが、発見する主体によって変化する

ナイルの水源の再発見―外傷臨床に精神分析的視点を生かす

主観的事実ではないのかという問題は、慎重な判断を要する。たとえば、「水源」という事実に最高度の価値を置き、その発見に探険家の人生をかける見方は、一つの集団(この場合、

大まかに言って近代ヨーロッパ)の世界観に支配されている。エジプト文明が、ヨーロッパ文明の起源にあるという認識がその文明を生んだナイル川への関心をもたらしめている。水源にそれほどの意味があること自体、その価値観を共有していなければ理解できないし、他の水源にそこまでの情熱が注がれていない事実は、ナイルへの関心の背後に極めて強い主観的価値観があることを示している。そうした価値観自体を批判的に検討することは可能である。外傷論に適用すれば、ある特定の外傷を問題の中心におく視点には、他の要因の軽視があり得るわけで、十分批判的に検討しておかねばならないし、外傷を重視する視点自体も、一つの理解の図式として、それ自体検討の対象になる。

こうした検討の可能性は含んだ上で、ビクトリア湖とナイル川とはつながっていないという意味での、「ビクトリア湖はナイル川の水源ではない」という主張は、当時の論争で敗北したように、やはり事実に反する。

(10) 「秘密」の共有の問題は、先に少し論じたことがある。森茂起「トラウマと「いま」―賠償と秘密の行方」川田都樹子編『いま』を読む―消費至上主義の帰趨』人文書院、二〇〇七年、二七二―二九六頁。

(11) 江口は外傷論、解離論の中でジャネの再発見が起こった経緯

を整理しながら、その過程でジャンネの仕事が単純化されて理解されている傾向を指摘し、「Janetの思考の多様性は、ほぼすべての著作が姿を現しつつある現在でもなお広大な未踏の地を残したままなのである」と述べている。江口重幸「ジャンネと解離」精神科治療学、二二(四)、二〇〇七年、四一五—四二二頁。

- (12) 以下の拙論を参照。森茂起「精神分析は解離とどうつきあってきたか」こころの科学、一三六、二〇〇七年、二九—三四頁。森茂起「トラウマの発見」講談社、第三章。これらの中で私は、解離と抑圧を対照させて論じたが、ジャンネの解離理論と対照させたとき、精神分析を何で特徴付けるかに関しては、議論が必要である。渡邊は、転換と対照させて論じ、解離が生物学的根拠に基づくものであるのに対して、象徴的次元を導入した点にフロイトの転換理論の本質を見ている(渡邊俊之「なぜフロイトは解離ではなく転換を選んだか」精神科治療学、二二(四)、二〇〇七年、四〇九—四一三頁)。また、中井は、抑圧よりも葛藤を解離と対比させたほうがいいのではないかという見解を述べている。中井久夫、飯田喜彦、藤川洋子、亀岡智美、片田珠美、田中究「(座談会)解離現象をめぐって」こころの科学、一三六、二〇〇七年、一三三頁。こうした議論は、フロイトの理論的変遷を考えたときいっそう複雑になる。ヒステリー研究の中で用いられた「抑圧Verdrängung」の概念自体が変遷しており、その後の不安学説の変遷、自我、超自我、エスからなる心的構造論の成立過程まで関係してく

る。また渡邊は先の論文で、当時ドイツ語でSpaltungと名付けられていた現象は、フランス語のdissociationに対応していたことを指摘し、分裂と訳すことでフロイトの解離理解を読み取りにくくしたとも述べている。Spaltungの概念については、さらに検討すべきであろう。私としては、ヒステリー研究の段階で、「抑圧」が、「知りたくない」ものを排除する主体的過程と考えられているところに、連合の破綻あるいは弱体化によって起こるとされる「解離」との違いを見ておきたい。ここには主体を、はじめから一個のまとまりを持ったものとするか、連合の働きがなければならなくなる機能の集合と見なすかという視点の違いがあるであろう。

- (13) 以下の文献を参照。シャーンドル・フェレンツイ『臨床日記』森茂起訳、みすず書房、二〇〇〇年。フェレンツイがSpaltungを用いるとき、dissociationと同じ概念として用いていた可能性も高い。

- (14) 一つの事例を用意して発表する私たちの「事例検討会」ではなく、その場で気になる子ども、あるいはしばらく話題に上っていないかった子どもを選択して話題に取り上げる形で「懇談会」を開いている。この形態については、先に報告したことがある。森茂起「グループワークとしての事例懇談会」児童養護施設における養護職員支援、岡田康伸他編『心理臨床における個と集団』創元社、二〇〇七年、二二—二五頁。
- (15) 注9で述べた内容に関係するが、「水源」の定義自体も曖昧であり、明確化するための議論が必要である。ピクトリア湖か

ら流れ出た川が、ナイル川につながっていることは確かだとしても、水源をその水が生まれた場所と考えると、ビクトリア湖周辺に降る雨、あるいは湖に注ぐ幾多の川と考えたほうが適当にも見える。それらのうちどれが水源かと問うても特定できないだろう。A子の外傷に関しても、それが今の症状につながっていることはほぼ間違いないとしても、それにさかのぼるネグレクト的状况がそれをいつそう外傷的なものにしたかもしれない。父親との別れも関係しているかもしれない。このように「水源」をたどってみると、ビクトリア湖の意味は、それが水の源であることよりも、ナイルの豊かな水量を提供し続けているその量にあるとも言える。A子の体験も、そこから受けるショックが並外れてひどいものであったという意味で、その体験の情動的「量」が膨大であるところに意味がある。こうした対比を続けていると、フロイトが用いたナイルの水源という比喩の射程の広さに驚かされる。

(16) 中澤正夫『ヒバクシャの心の傷を追って』岩波書店、二〇〇七年。
(17) 岡野憲一郎『解離性障害―多重人格の理解と治療』岩崎学術出版社、二〇〇七年、一四三頁。

(18) フェレンツイ『臨床日記』二七九―二八二頁。